ソマイア・ラミッシュ詩集「わたしの血管を貫きめぐる、地政学という狂気」を読む
～抑圧と闘う詩人の声を私たちは受け流すことなく受け止め、何を学ぶのか～

高細玄一

2023年 8 月 15 日、タリバンによるアフガニスタンでの政権掌握2周年に合わせて、フラジャイルを主催する柴田望氏の献身的な尽力により、タリバンの芸術と女性の人権に対する抑圧に対する詩的抗議として「詩の檻はない」が刊行された。私はその呼びかけに答えた一詩人に過ぎなかったが、この詩的抗議の流れを何とか広げたいと詩人の遠藤ヒツジ氏と相談し、2023年10月15日横浜ことぶき協働スペースの全面協力の下、詩の檻はない朗読会を開催するサポート役を買って出ることになった。朗読会は地元の神奈川新聞等でも大きく報道され、ネット配信もされ、参加者の多彩さも含め、現代詩のイベントとしても画期的な意義を持つものであったと思う。その朗読会後の懇親会の席で、ソマイアさんが12月に来日するときに、「もう一つの日本を見てもらう意味でも、ことぶきでイベントを開催してはどうか」という提案があり、流れのなかで私が12月19日のソマイアさん来日のイベントの裏方を担うこととなった。19日当日、ソマイアさんから私たちに1冊の詩集がプレゼントされた。それが今回翻訳された詩集、「わたしの血管を貫きめぐる、地政学という狂気」であった。

この詩集は、それぞれの詩には題名がなく、1から20の数字が振られている。おそらくアフガニスタン脱出直後から書かれた詩篇であり、すべての詩篇が祖国アフガニスタンへの去り難い思いとそれを奪ったタリバンへの怒り、さらにはこのアフガニスタンの現状を「片目」でしか見ようとしない世界の民主主義陣営の「二重基準」、これを変えるために詩を武器に自分で立ち上がるしかないという決意があふれている。すべての詩篇を一遍ずつ全てここで紹介することはできないので、みずからの生をかけたソマイアさんの詩集をぜひ手に取って読んでほしい。以下引用する詩は()で詩の番号、「」で引用部部分です。

(1)「でも、自爆テロによって、私の家は吹き飛んでしまったの。」「自爆テロ」はおそらくタリバンそのものを象徴していると思われる。詩を書くこと、芸術そのものを敵視するタリバンによって、詩人や芸術家が存在することすら許されなくなった。正常な神経を保つことすら困難になったことをこの一行が訴えている。この詩の冒頭「私はあなたの最期の笑みを額縁に入れ、壁にかけて飾りたいと思っていた」と書いている。「あなた」とはソマイアさんが愛するアフガニスタンのことだろう。この作品はアフガニスタンを愛してきた詩人が強制的にその地を追われる苦悩の表現であると思う。

(2)では自らの存在を「自らの軌道を離れたひとつの衛星」と表現し、「別の存在」へと成り変わるべく、としている。さらに「自爆とは必ずしも、肉体の死を意味しない」とあり、タリバンによって奪われた、故郷へラートに連なるすべて、心の自由、政治的社会的自由などを奪われたことを暗示しているのではないかと思う。

(5)「あなたたちは私を殺す」で始まる詩は、タリバンによる女性への抑圧を「私の髪が、あな

たたちの凡庸な思想のなかで腐り果てるときに、」と痛烈に批判している。この詩を読むとき、ソマイアさんやアフガニスタンの女性詩人が、この詩を命がけで書いていることを忘れてはならない。単に皮肉っているのではなく闘っているのだ。「そして私たちは死からよみがえる。」「労働にパン、それに自由を！女たちに生活の自由、自分の人生を！」これはアフガニスタンの女性たちが弾圧されながらも街頭デモで掲げてきたスローガンでもある。
（6）故郷の葡萄畑が焼かれた。そこから「私は見た」「焼け跡から生えたあなたの木々が」「この土地では、生き物の瞳までを、焼き尽くすことは出来ないの。」とタリバンの凶暴な支配に屈することなく、ひそかに芽を出す準備をしている「希望」を語る。
（9）タリバンの支配する国境を脱出する際の息詰まる緊張した状況が描かれている。私は国境越えで狙撃され「私の血は、ハリー川いっぱいに流れる/水くらいにありふれた/無価値なもの。」「それでも私は生きている」「砂漠と海を渡って、/張り巡らされた有刺鉄線と、/飢えた番犬どもの襲撃を生き延びて。」入国管理官に7桁の番号として登録され、四方八方に走り出すが、「止まるんだ！」と制止され「驚いた私は自分の番号を取りこぼす。」これはソマイアさんの実体験ではないが、多くの人が体験した「悪夢」なのだろう。最後に「痛感する。これまで故郷の外で生きたことがなかったので」と自分の「疎外感」語っている。
（10）「世界のどの地域も夜」という印象的な書き出しで始まるこの詩が今回の詩集の10番目に登場する。夜＝独裁的な支配を連想させる。この詩は「詩の檻はない」に収められ、「民主主義を語る人々よ、アフガニスタンの現状を見て見ぬふりはするな」という強烈なメッセージを発していた。今回少し訳が変わりさらにこの詩のもつメッセージが伝わりやすくなった。「自由な世界の皆さん、世界中の人たちを自由にしてあげて。」今まさに、断末魔をあげて「ひとかけらの石」が死んでいくその時を見逃さないで！それを「忘れてしまうのでしょう/私たちのことなんて」同じ時間に生きていることさえ忘れ去っているアフガニスタンに無関心な世界を「それで本当に自由なのか」と反語的に語っている
（11）世界はこのままずっと無関心なままなのだろうか。ソマイアさんは「私のランプは夜更けまでともらない。」「親しい人はどこにもいない」「ヘラート訛りが入り混じった別の言葉で話そうとしても、声が詰まる」と孤独な状況を書きしるしている。
（12）イスラム教徒ではないと糾弾され殺された27歳の女性ファルフンダに捧げた詩。ファルフンダという名前は「祝福」を意味するのに殴り殺しにされた。ソマイアさんはアフガニスタンの男性たちがいつまでたっても、女性のために全く声を上げようとしない現状を「そして今や、/この女性の遺体が/私の中でバラバラになる」「アフガニスタンにはもはやファルフンダはおらず/祝福も歓喜も立ち消えた」とかなり厳しく批判している。
（13）故郷ヘラートを「小川」「穂軸の香り」「霧のようなミントの薫り」などの印象的な抒情で語っている。記憶の中の故郷に戻りたいという強い思いが伝わってくる
（14）「私の詩は/発見でも、比喩でも、幻想でもなく/ただこう言っているだけ/私はアフガニスタンから来た」おそらく、当初はソマイアさんを受け入れた側はソマイアさんの詩の背景はあまり重要視せず、表面上や技術上の「表現の豊かさ」を求めてきたのではないだろうか。

「そして/あなたたちは悲鳴をあげている/これこそが私が本にしたい事実」つまり、タリバンの言論弾圧と女性の抑圧に抗して自分がいま目指す詩との落差、そのリアクション。
(15)ソマイアさんの生まれる前から戦争が続いていた。「苦しみ、痛み、傷を負って」国外追放されるもの。ソマイアさんは1986年イランのテヘランに逃れた。「でも九歳のときに知った/不利な地理条件を。」「十四歳の時、私は母親の纏めた荷物の束を解いた/その香りが私を包み込み／私を揺り動かした」アフガニスタンに戻れた喜び、私を揺り動かす故郷。しかしその故郷に今あるのは「それは狂気」タリバンによる芸術の検閲と女性への性暴力。芸術には「死」を持って臨むタリバンだ。ソマイアさんは決意する。「私の血管を貫きめぐる、地政学という狂気」先祖代々のアフガニスタンで流れる抵抗の歴史とその血を私は受け継ぐ。「死をもって死に立ち向かうしかない。」
(16)ソマイアさんはこう述べる。「詩を装填せよ、銃のように/戦場の力学であなたは/武器を取らざるを得なくなる。/敵は何の言葉や仕草も持っていない、合言葉も/色彩も/合図も/符丁もない！」タリバンがどのように奪おうとも、隠喩、伝統的な表現に根差す芸術、音楽、そして詩を人の心から消すことは出来ない。「あなたの思考を/詩に装填せよ/戦争の学び舎がそそり立つ/あなたの内側で/次はあなたの番かもしれない」たとえタリバンの弾圧で自分が倒れても、その火を「あなた」がきっと引き継ぐだろう。詩を書くことは命がけの行為だとしても。「死をもって」闘うのだ。
(19)詩人ナディア・アンジュマンに捧げられた詩。ソマイアさんと同じヘラート出身のこの女性詩人は夫の暴力によって殺された。「空は死んでしまった/胸を引き裂き、臓腑をえぐりだす風のせいで」夫(男性)の暴力によって殺されたことを詩で表現し、命を絶たれた詩人は天からほほえむ、そして。
(20)「書け」とあなたは言った。「言葉の奇跡を教えてくれと」それはタリバンによって奪われたアフガニスタンを取り戻す闘いだ。この「書け」といった「あなた」は「ファルフンダ」や「ナディア・アンジュマン」も含む「いのちをかけて詩を書き続けてきた人々」のことだと思う。当初私はこの詩だけを読んだとき「神」的な存在を連想していた。しかしソマイアさんは早い段階で神の存在に疑いを持ったと述べている(2024年オランダ・トロ―紙のインタビュー)
「でも、全く知らなかった/終わりが来ることを/何物にも　成れず/すべてが　無に帰することを」タリバンによって、言論の自由、内心の自由、表現方法そのもの、故郷ヘラートを奪われ「終わり」が来た時、「千万無量の祖先」たちの言葉を引き継ぐことは出来るのか。もう何も書けないのか。これまで書いてきた「私らしさも/色彩も//人間らしさも/でももう書けなかった」「意味のない(言葉)も/風化した(言葉)も/うわついた(言葉も)」もう書かないという宣言で、この詩集は終わる。いいかえれば、言葉を武器にする。詩を武器にして書くという宣言であると思う。
この詩集発刊について、ソマイアさんは「沈黙と検閲に直面している故郷アフガニスタンにおけるたくさんの芸術家の声をこの本は反映している」と述べている。「芸術を通じて、私たちは共に、抑圧の力と闘い続けることが出来ます。詩がもたらす希望、公平で思いやりのある世

界への希望を胸に抱きつつ、心から感謝をこめて」とあとがきは締めくくられている。詩の持つ力をこのように語れる詩人を私は心から尊敬する。同時に、この詩集の「抑圧と闘う詩人の声」を私たち日本の詩人は受け流すことなく受け止め、何を学ぶことが出来るのか。それが鋭く問われているのではないか。世界が新たな分断に向かいつつある今、まさに時宜を得た詩集であるといえる。